

『獨不見』 沈 佺期

晩秋 わび住まいの若妻が

遠征中の夫を憶う

獨不見

沈佺期

廬家少婦鬱金堂

廬家の少婦

鬱金堂

海燕雙棲玳瑁梁

海燕雙棲す

玳瑁の梁

九月寒砧催木葉

九月寒砧

木葉を催し

十年成戍憶遼陽

十年成戍

遼陽を憶う

白狼河北音書斷

白狼河北

音書斷え

丹鳳城南秋夜長

丹鳳城南

秋夜長し

誰爲含愁獨不見

誰が爲に愁いを含む獨不見

更教明月照流黃 更に明月をして流黃を照らさしむ
作者について
六五六〜七一一四？初唐の詩人。相州（河南省安陽）の人。字は雲卿。六七五年の進士で、則天武后の時代に權勢のあつた張易之に取り入って宮廷詩人として活躍した。その後政府の要職に就いたが、武后政權が倒れ、後ろ盾もいなくなり、次の中宗に政權が移つた七〇五年に収賄の罪で驩州（北ベトナム）に流された。その後都に呼び戻されると、再び要職に就き、皇太子付の役職を得るまで出世した。律詩のスタイルを完成した人として名があり、宋之問と並んで「沈宋」と称される。「唐詩選」にはこの詩のほか五言排律二題・七言律詩五題・七言絶句一題が収められている。中でも玄宗皇帝の天下の隆盛を願つた七言絶句「龍池篇」は高い評價がある。

語意と意解

▽歌題

「唐詩選」には「古意」（昔風な趣きを引き合いにし作つたという意味）とある。妻が遠征する夫を案じたテーマは唐以前からくりかえして詠われていたので、先行漢詩も多い。それらを参考にしてあるので「古意」としている。「全唐詩」には「古意、補闕の喬知之に呈す」（昔風な歌で、

左遷された下級役人の喬知之に贈る」と題している。「樂府詩集」や「唐詩三百首」には「独不見」（自分だけが会いたい人にも会えない）とある。したがってこの作品には諸本により字句の異同が多く、どの書のものが原型なのか不明である。

〈首聯〉

・盧家……盧という姓の家。盧家は古くからの豪族で、盧家といえはそれだけで名門の家柄を表わす代名詞のようなもの。ここでは特に具体的な家族を示すのではない。

・鬱金香……鬱金香を塗り込んだ家。この詩全体が三百年前の梁の武帝の詩「河中之水歌盧家少婦」（後述）を引き合いにしていることは明らかで、その語句を借用している。豪華な家を象徴する。

・玳瑁梁……べつ甲類をはめ込んだ梁はり。これも豪華な造りの家を表わす。

意解

盧家の年若い妻が暮らしている鬱金香を塗り込めた豪華な家の中には、べつ甲で飾られた見事な梁も用いられており、そこに、いかにも仲睦まじげな雌雄のツバメが並んで止まっている。

〈頷聯〉

・寒砧……「砧きぬた」は冬衣の準備のため綿布や絹布を打つ台、またはその音といわれている。布や毛皮を叩いてやわらげ、毛ばだたせたりすると保温効果が出るもので、秋から初冬にかけての婦人の年中行事のような仕事。その音はもの寂しいものとされている。「寒」はもの寂しい。

・催……「うながす」とも訓読できる。砧の音が落葉を促すようなというさま。

・遼陽……遼寧省にある町。次の白狼河と同地で、夫の住む地方。初唐時代の遼寧は中国の東北部の果てのそのまた向こうぐらゐの感覚で、僻地そのものである。

意解

陰曆九月になり、冬も間近で、あちこちの家から砧の音が、落葉を促すかのようにわびしく寂しく聞こえる頃、若妻は改めて十年の間、辺境の遼陽地方の守りについている夫の身の上を思いやる。

〈頸聯〉

・白狼河……遼陽を流れる大河。

・丹鳳城……長安城の別名。宮門の上に首と翼の赤い鳳凰の飾りが設けられているのでこの名がある。この

語は前句の「白狼河」と対になっており、恐ろしい白いオオカミと 優しい赤いオオトリの語の中に、夫と妻の心理が詠みこまれており、妙味ある表現である。

意 解

遼陽を流れる白狼河の北に駐留しているだろう夫からは 便りもとだえ、空しくそれを待つ長安城の南に暮らす若妻にとつて、秋の夜はひとしお長く感じられる。

〔尾聯〕

・独不見…古来の樂府曲の名。会いたい人に会えないことを嘆く。

・流黄…黄色の繭からとつた絹糸または布。上流家庭で織られる。

・八句七字…直訳すれば「更に明月に萌黄色（もえぎいろ）の絹の布を照らさせる」となるが、これではわかりにくい。いくつかの意識文を参考に挙げてみる。

○ただ無情な月の光ばかりが若妻の織る流黄の上に差し込んでいる。（新釈漢文大系「唐詩選」明治書院）

○その上名月が差し込んで、玉虫色の帳（とばり）を照らすのを見て、昔、夫とともにこの部屋で睦まじく同じ月

を見て楽しんでことなど思

い出して一層

悲しくなつて

涙が流れて尽

きない。（「唐

詩選詳解下」

明治書院）

○その上名月は

部屋に差し込

んで織機の上

の流黄を輝か

せる。（「唐詩

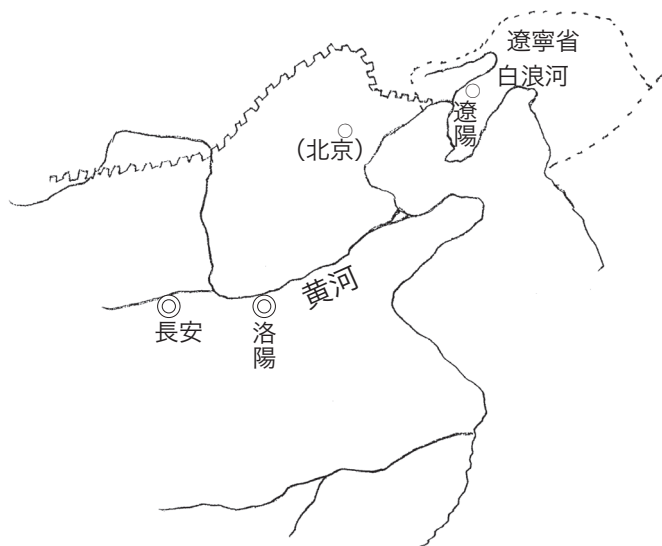
鑑賞辞典」東

京堂出版）

○（若妻の）わたしの（見つめ続ける）名月の光に、萌黄色の絹の布を照らしださせるなどということがあろうとは（いったい誰が知ろうか）。（まことに非情なのはこの砧の音と名月の光であることよ。（「唐詩三百首詳解」大修館書店）

意 解

気を紛らわそうと独不見の曲を奏でてみると、このもの



哀れな調べは他の誰でもなく、かえって若妻自身の心をますます悲しくさせ、さらに漏れ来る明月は、夫に着てもらえる日もあろうとかすかな望みを持って織っている流黄の布を照らすので、一層悲しさが募る。

閨怨

閨中の少婦愁いを知らず
春日粧ひるよめを凝こらして翠楼すいろうに上る
忽ち見る陌頭楊柳の色
悔くゆるくは夫婿ふしよをして封侯ほうこうを覓もとめしめしを

鑑賞

① 先行漢詩…漢詩にも先行する作品をヒントに、語句や題材を借用しながら、さらに良い作品を試みることが行われる。この「独不見」もその一つである。先行漢詩の一つを紹介する。

「盧家少婦」梁 武帝（長い詩なので前後を省く）

一五嫁して盧家の婦と為る

一六兒を生む字は阿侯

盧家の蘭室らんしつ柱かづらを梁と為し

中に鬱金蘇合香有り

② 閨怨詩…広義では女性の怨みの歌であるが、狭義では妻や恋人が部屋の中から、遠征している人や夫の身を案じて悲しく歌う詩をいう。この種の詩は「独不見」をはじめ多くあるが、関西吟詩文化協会の採用のものでは古詩の「子夜呉歌」くらいである。閨怨詩人として有名なのは盛唐の王昌齡である。その代表作を載る。